

# 電源立地地域温排水対策事業 大間地点・ウニ移植試験

(要約)

桐原 慎二・須川 人志

大間沿岸における重要な水産資源であるキタムラサキウニ資源の有効な利用を目的に、平成6年から大間沿岸で天然種苗の移植方法を検討してきた。調査を通じて、キタムラサキウニには、ハナゴウナ科の小型巻貝バフンウニヤドリニナの寄生及びそれに伴う斃死が認められたため、平成7年度には大間沿岸においてその寄生状況を調べた。なお、詳細については、『平成7年度電源立地地域温排水対策事業調査報告書(大間地点)』平成8年3月として報告した。

## 調査結果

キタムラサキウニの棲息密度は、深所では9.5-17個体/m<sup>2</sup>に対して、浅所(水深8-12m)では0.9-1個体/m<sup>2</sup>となり、深所(水深20mまたは30m)で高い値を示した。棲息個体のサイズは場所によって異なり、殻径の平均値が大間崎の東側で7.2cm(標準誤差0.59)と大型個体が卓越したのに対して、北側で4.5cm(同1.95)、西側で3.9cm(同0.45)となった。

バフンウニヤドリニナの寄生は、深所では場所によって寄生割合が異なり、東側及び西側では各々91.3%、70.7%が寄生を受けたのに対して、北側では21.8%に留まった。また、浅所では50-67%の範囲に寄生を受けていた。その寄生が採取されたほぼすべてのサイズに見られたため、その大きさにかかわらず寄生を受けるものと考えられた。

身入りの平均値は、バフンウニヤドリニナの寄生を受けた個体が18.8%(標準誤差6.9)に対して、寄生を受けていないものが21.7%(同14.6)あった。寄生を受けたものの身入りはやや低い値を示したが、その差異が標準誤差の範囲にあることから、両者間の身入りには顕著な差異がないと思われた。

以上の結果から、バフンウニヤドリニナは大間沿岸に広く分布していると推察された。また、本調査でバフンウニヤドリニナの寄生を受けた個体の11.8%に棘の脱落が認められた。これから、寄生率の高い地点では、今後、斃死状況に注目すると共に、漁獲に十分な身入りが認められる場合には積極的に漁獲すべきと言えた。

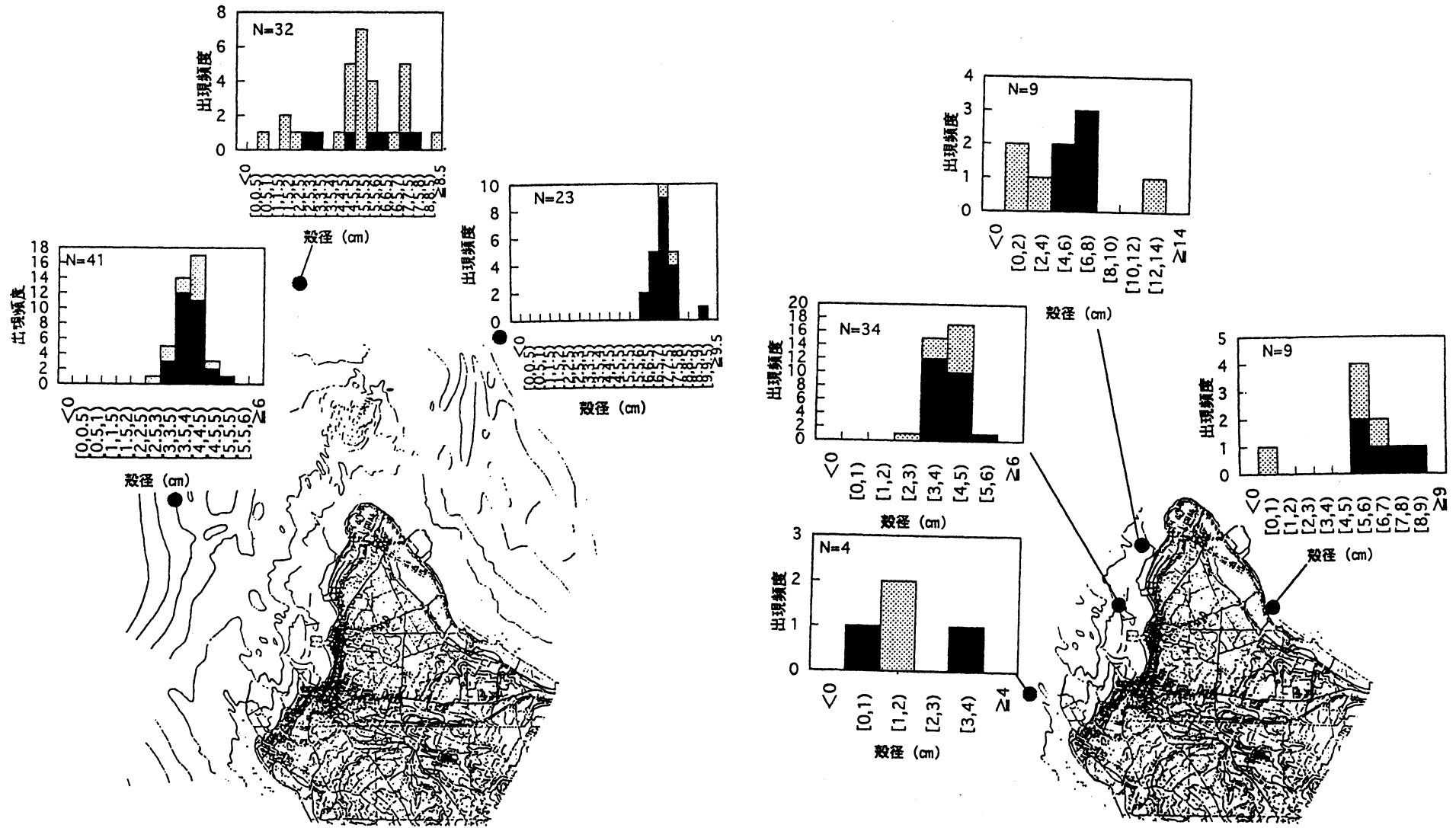


図1 / 大間沿岸の深所から採取したキタムサラキウニのから径組成. 着色部分はパファンウニヤドリニナの寄生個体.

図2 / 大間沿岸の浅所から採取したキタムサラキウニのから径組成. 着色部分はパファンウニヤドリニナの寄生個体.